【八朔巡礼物語り】

第1話

尾道市文化財保護委員
尾道ユネスコ協会事務局長
写真家 村上宏治

「八朔ゆかりの会」設立 八朔発祥の地・密厳浄土寺

二〇二二年十月十三日、八朔発祥の地・広島県尾道市因島田熊地区の密厳浄土寺にて、因島特産の八朔。先人達の苦悩の時代と活動、歴史研究と史料編さん、散逸した資料の収集と整理、地域振興、新規就農を強く意識しての、「八朔ゆかりの会」が誕生しました。会長には、出荷組合を設立し販路拡大に貢献した、八朔の父ともいわれた、田中清兵衛氏の親戚筋にあたる、田中康貴さんが会長を務め、役員に因島商工会議所、JA尾道市、JA広島果実連代表、同寺住職と関係者十名で設立。八朔関連産業の発展並びに、八朔を中心とした地域の観光資源に寄与する事を目的に、因島だけでなく全国の八朔産地へと広がりを意識して「八朔ゆかりの会」が誕生しました。

八朔の原木と八朔地蔵尊と共に「八朔ゆかりの会」会長と役員一同

八朔を全国に普及することに尽力
田中清兵衛の銅像

八朔発祥の石碑

密厳浄土寺（尾道市因島田熊町）

八朔ゆかりの会 設立総会時の様子

万延年間の八朔発見から、現代、そしてこれからへ

開山四七〇年を迎える密厳浄土寺。その寺領に多くの名も無き柑橘が自生していました。島の人は、それらを「ジャガタ」と呼んでいました。

日本が明治維新と文明開化を迎え、西洋に学び、西洋に追いつけという時代の到来。柑橘もその重要な役割を果たしていた事はあまり知られていません。「日本貿易精覧」によれば、明治十七年には北米と中国大陸に可成りの量の柑橘類を輸出しています。因島からも相当量の柑橘が輸出されていました。輸出した柑橘に「かいよう病」という病気が海外で流行し、スウィングル博士を中心とした、柑橘類の病害に関する調査団が来日。各地を廻り最後に、因島に自生する柑橘をくまなく調べたところ、感染した柑橘は見当たらず、日本が原因ではないことが立証されました。

調査団の目に留まる事となるのが、後に八朔と命名される名も無き柑橘でした。

因島来島時のスウィングル博士と調査団一行

その優位性を一行から教授受け、密厳浄土寺住職・小江恵徳（おごうえとく）上人により、後に八朔と名付けられます。何故八朔が自生していたのでしょうか。それはまだ解明されていません。

八朔の母は東南アジア原産のザボン、父は東南アジア原産の九年母と、近年DNA解析で判明しました。密厳浄土寺は青影山の青陰城址の麓に位置します。東南アジアと交易をしていた、あの因島村上海賊の本拠地。寺領には、自然交配した様々な柑橘類が自生していたと記録に残ります。一五八九年の古文書が九年母について植樹する事と明記されていました。

ジャカルタや東南アジアから渡来してきたものを、ジャガタと呼ぶと文献に出逢いました。ジャガイモもその一例との事でした。

一つの柑橘の生い立ち。ルーツを探っていくと様々な人間模様と、その柑橘の必然性が垣間見えてきます。何故因島に、村上海賊の居城跡に沢山の名も無き柑橘が自生したのか、なぜ和歌山にも八朔の産地が。現時点では推測の域を超える事はできません。

田中会長は言います。「八朔には歴史浪漫があるはず」。

八朔の原木と
八朔地蔵尊

八朔ゆかりの会　会長 田中康貴氏
（大信産業株式会社 会長）

できうる限りのデータと資料を縦軸に、許される範囲での推測を横軸に、各地を廻り資料と取材を繰り返し、【八朔巡礼物語り】を綴っていきたいと思っています。

「八朔ゆかりの会」設立総会時の八朔展示室（密厳浄土寺）

八朔の歴史を辿るため、文献を収集しアーカイブしているところです